

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：35302

研究種目：若手研究

研究期間：2022～2023

課題番号：22K13025

研究課題名（和文）ポスト撮影所時代の日本映画における村上春樹映像化作品の位置づけに関する基礎研究

研究課題名（英文）Preliminary Research on Adaptations of Murakami Haruki's Works in the Japanese Cinema of the Post-Studio Era

研究代表者

藤城 孝輔（Fujiki, Kosuke）

岡山理科大学・教育学部・講師

研究者番号：20887624

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、アダプテーション作品の分析を通して村上春樹と日本映画の関係性の変遷を示した。村上は1970年代末に既存の日本文学とは大きく異なるタイプの作家として台頭したが、ポスト撮影所時代の日本映画の文脈において、彼の作品が自主映画出身の新しい世代の映画作家たちにとって新しさを象徴するものであったことが明らかになった。その後、2000年代以降には村上の小説のグローバルな流通に伴い、村上作品のアダプテーションがグローバル・アート・シネマの文脈へ広がっていった過程をたどり、村上の物語が「日本映画」や「日本文化」という枠にとらわれることなく、多様な社会的コンテクストに再文脈化されてきたことがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は村上春樹映像化作品の包括的な研究を通して、映画研究およびアダプテーション研究に寄与するものである。個々の作品の事例研究にとどまらず、1980年代から2020年代初頭にかけての日本文学のアダプテーションの傾向の変遷をとらえた。特に2004年の『トニー滝谷』以降、村上の原作が日本映画の国際的な評価の足がかりとなってきたこと、濱口竜介や是枝裕和をはじめとする現代の日本の映画作家が日本文化や日本らしさよりも文化的な普遍性を意識した作品づくりを行ってきたことの指摘を通して、本研究の内容は今後の日本映画の国際的な展開に示唆を与えるだろう。

研究成果の概要（英文）：In this study, the relationship between Murakami Haruki's works and Japanese cinema was traced through the analysis of adaptation works. At the end of the 1970s, Murakami emerged as a writer with a significantly different style from existing Japanese literature. His works thus came to symbolize novelty for a new generation of film directors from the post-studio era of Japanese cinema. Subsequently, as Murakami's novels began to circulate globally in the 2000s, the adaptation of his works expanded into the context of global art cinema. This study revealed that Murakami's works have been recontextualized in various societal contexts without being confined to the framework of "Japanese cinema" or "Japanese culture."

研究分野：映画学

キーワード：アダプテーション 村上春樹 日本映画 自主映画 アート・シネマ

1. 研究開始当初の背景

これまで村上春樹の小説と日本映画の関連は十分に顧みられてきたとはいえない。四方田犬彦は、村上の日本映画に対する姿勢を「日本映画への一貫した拒否」と見なし、それは村上が「日本と呼ばれるローカルな物語をわが身に引き受けることを拒否してきた」ためであると解釈している(176)。実際、明里千章が指摘するとおり、村上の小説の中で言及されるのはアメリカ映画やヨーロッパ映画が中心であり、日本の映画作品への明示的な言及は『1Q84』(2009年)に黒澤明の『蜘蛛巣城』(1957年)と『隠し砦の三悪人』(1958年)が登場するまではほぼ皆無であった(110)。村上のアメリカ文学やアメリカ映画に対する関心はこれまで学術的にも批評的にも注目されてきた一方で、村上は日本映画に対しては無関心であるという通説が一般的であった。また、日本映画における村上作品の初期のアダプテーションである『風の歌を聴け』(大森一樹監督、1981年)、『パン屋襲撃』(山川直人監督、1982年)、『100%の女の子』(山川直人監督、1983年)、『森の向う側』(野村恵一監督、1988年)は同時代の映画評で早くも失敗作と見なされ、学術的には軽視されてきた。

本研究では、まず村上が1980年代前半に映画批評家として日本映画を積極的に論じている事実に着目し、その当時村上が論評した日本映画が後年の小説作品に影響を与えていることを明らかにした。1980年代当時、村上は若手の流行作家として日本のメディア文化の中心的な位置にあり、日本映画とも原作の提供や批評活動を通して緊密な交流があった。そのため、村上と日本映画の関係を明らかにすることは、1980年代の日本映画史をよりよく理解するため、さらには世界進出を強く意識した2000年代以降の戦略的な村上作品のアダプテーションの背景を知るための急務であると考えた。

これらの目的を達成するために、映画アダプテーションに焦点をおいた本研究が核心に据えた問いは「村上春樹の文学が1980年代の日本映画においてどのような意義を持ち、2000年代以降の日本映画の国際化の素地がどのように作られたか?」というものであった。村上が1980年代の自作のアダプテーションの経験から何を学び、1990年代の沈黙を経て2000年代に戦略的な原作提供を行うようになったのかを解き明かすことを試みた。これは村上作品のアダプテーションのみにとどまらず、1997年のカンヌ国際映画祭における『うなぎ』(今村昌平監督、1997年、パルム・ドール受賞)と『萌の朱雀』(河瀬直美監督、1997年、カメラ・ドール受賞)の同時受賞以降に活発化した日本映画のグローバル戦略を解明する上でも有意義な研究となると考えた。

2. 研究の目的

従来、アダプテーション研究では原作への忠実さが取りざたされることが一般的であった。とりわけ村上春樹のような人気作家の作品研究においては、その傾向は否めない。しかし、本研究では、村上春樹作品の映画アダプテーションの日本映画史における意義を問うことを目的とした。これまで、特に初期の村上作品アダプテーションへの批評では、原作への忠実さにもとづく作品の評価が見られがちであったが、それとは異なるアプローチを展開したといえる。具体的には、個々のアダプテーションを映画史ないし社会的文脈の中に位置づけて映像分析を行い、その意義を検討した。日本アートシネマギルドの出資と配給により製作された『風の歌を聴け』は、1970年代の日本の撮影所システムの衰退に伴う、独立系映画製作の勃興と1980年代の日本映画に見られるノスタルジアの傾向という文脈を通して分析した。山川直人監督の短編映画『パン屋襲撃』と『100%の女の子』は、ぴあフィルムフェスティバルに代表される1970年代後半以降の自主製作映画の流行という文脈を通じた検討から出発し、同作の原作小説が世界各地でアダプテーションが繰り返されるようになるまでの過程を概観した。村上の短編小説「土の中の彼女の小さな犬」(1982年)からタイトルを変えて映画化された『森の向う側』は1987年に社会現象となった村上の長編小説『ノルウェイの森』のヒットという背景に焦点を当てて、原作からの諸々の改変の意義を考察した。このようにテキストと同時代のコンテキストの往還を通して村上作品のアダプテーションを分析し、その歴史的意義を見出す試みは、アダプテーションが原作の本質をいかに忠実に表象できているかを問うことに終始する傾向の強かった先行研究とは一線を画す、本研究における最大の学術的独自性であるといえよう。

本研究は、村上文学の映画アダプテーションの歴史的意義を明らかにすることによって、1980年代の初期作品から今日にいたるまでの村上作品のアダプテーションの社会的役割の変遷を理解する上での重要な基礎研究となることを目指している。『森の向う側』以降、村上は1990年代には映画化の許諾を一切出さなかったものの、2000年代に入るとイギリス人演出家による2003年の舞台『エレファント・パニッシュ』(サイモン・マクバーニー演出、原作は英訳短編集 *The Elephant Vanishes* [象の消滅])とスウェーデンの実験短編映画 *Dansa med dvärgar* [小人たちと踊る](エメリー・カールソン・グラス監督、原作は短編小説「踊る小人」)を皮切りに、ロカルノ国際映画祭に出品されて審査員特別賞を受賞した『トニー滝谷』(市川準監督、2004年)ロサンゼルスに舞台を移したアメリカのインディペンデント映画『神の子どもたちはみな踊る』(ロバート・ログヴァル監督、2008年)ベトナム人監督トラン・アン・ユンを起用した『ノルウェイの森』(2010年)など、国外へのマーケティングを強く念頭に置いたアダプテーションが行わ

れてきた。この2000年代以降のアダプテーションに顕著に見られる戦略は、1980年代の初期のアダプテーションの不評の反省を受けたものとして理解することができるだろう。したがって、村上アダプテーションの出発点を探究する本研究は、国内のファン向けのアダプテーションから国際的なマーケットにターゲットを切り替えた村上春樹のアダプテーション戦略をモデルケースとして示し、日本文化のグローバル化に対する提言を生み出す創造性を有している。

3. 研究の方法

個々の映画化作品がそれぞれの社会的コンテクストにおいて有していた意義を明らかにするため、本研究では映像テキストとコンテクストの往還を分析的手法として強調した。アダプテーションは異なるメディア、ひいては異なる時代や文化のコンテクストに物語を移植する行為であり、作品によって程度の差はあれ、原作の物語は必然的に形を変える。内容の改変は、映画監督によるアーティストックな選択の場合もあれば、時間の制限などメディアのフォーマットに由来する要請や金銭的都合、アダプテーションが行われる社会文化にもとづく事情など、さまざまな要因で行われる。本研究では、原作に対する忠実さの問題の検討にとどまらず、そういった改変部分にアダプテーション独自の意義を見出した。そのため、映像テキストの分析を重視すると同時に、同時代の新聞・雑誌といったメディアの言説を一次資料として参照し、アダプテーション作品をとりまくコンテクストおよび、そのコンテクストの映像テキストへの影響を示すことに努めた。さらに、1980年代のポスト撮影所時代の日本映画から2020年代のグローバルな舞台での日本映画作品までの映画史を参照することで、村上アダプテーションの傾向の変遷を歴史的に把握することを企図した。

4. 研究成果

本研究では、村上春樹の主要な映画化作品の分析を中心に、半世紀近くに及ぶ村上春樹の文学と映画アダプテーションの関係の歴史をたどった。まず、鈴木清順の映画に対する村上の批評をめぐる研究では、村上のキャリア初期における日本映画批評と広義のアダプテーションと呼べる後年の小説への影響をケース・スタディーとして取り上げることで、これまで「非日本的」と見なされることの多かった村上文学と日本映画の親和性の高さを論証した。さらに、東日本大震災の表象を例として、社会的コンテクストの理解を映像テキストの分析と同程度に重視する本研究の分析手法を実践的に示した。

続いて、『風の歌を聴け』から『ドライブ・マイ・カー』(濱口竜介監督、2021年)までの個々の映画化作品を分析対象とした。とりわけ、1980年代のポスト撮影所時代の自主映画における映画化作品に焦点を当て、撮影所システムが崩壊した一方でぴあフェスティバルなど自主映画や学生映画からプロになれる機会が生まれた1980年代の日本映画界において、当時若者世代の文学の旗手と見なされた村上の文学を映画化する意義を明らかにした。

さらに、村上が映画化を一貫して拒むようになった1990年代の間隙を挟み、一部の映画作家に再び許可を出すようになった2000年代の作品の分析を行った。アート・シネマの枠組みの中で言及されることの多いこの時代の作品は、原作に忠実であることへの固執が際立っており、『海辺のカフカ』(2002年)以降国際的な評価が格段に高まった村上文学に対する気負いが色濃く感じられることを指摘した。『トニー滝谷』『神の子どもたちはみな踊る』『ノルウェイの森』といった作品を分析し、それぞれの映画作家による原作との格闘に重点をおいて議論を展開した。

そして、内容の大幅な改変が一般的になり、大衆文化やグローバル化などコンテクストが多様化する2020年代に目を向けた。アート・シネマとは対照的なアイドル映画としての側面をもつ作品や、舞台を韓国に移し、プロット自体も大きく変えた作品、村上の複数の小説から題材を得つつも独自の物語を展開する作品など、多様なアプローチがこの時代から現在にかけて見受けられた。村上と日本映画との関わりの変遷を理解するうえで、『ドライブ・マイ・カー』の分析を行ったほか、同時代に濱口と同様にカンヌ映画祭を中心とする国際映画祭の文脈で注目を集めることの多い日本映画作家、是枝裕和の作品を着想の源泉となった実際の事件と比較分析し、濱口や是枝らが日本文化や日本らしさよりも文化的な普遍性を意識した作品づくりを行ってきたことを示した。

<引用文献>

- ① 明里千章「映画から見た1Q84」ジェイ・ルービンほか著『1Q84 スタディーズ Book 1』若草書房、2009年、83-115頁。
- ② 四方田犬彦「村上春樹と映画」柴田元幸/沼野充義/藤井省三/四方田犬彦編『世界は村上春樹をどう読むか』文藝春秋(文春文庫)、2009年、161-177頁。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 藤城孝輔	4. 巻 15
2. 論文標題 アダプテーションが媒介するノスタルジアとトラウマ 『風の歌を聴け』映画化における時間の主観性	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 JunCture 超域的日本文化研究	6. 最初と最後の頁 138 ~ 152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18999/juncture.15.138	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤城孝輔	4. 巻 2
2. 論文標題 反復されるアダプテーション 「パン屋 (再) 襲撃」および「4月のある晴れた朝に100パーセントの女の子に出会うことについて」映像化作品におけるグローバル時代の戦術	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 村上春樹とアダプテーション研究	6. 最初と最後の頁 25 ~ 52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤城孝輔	4. 巻 12
2. 論文標題 映画『ノルウェイの森』におけるグローバル・アート・シネマへの擬態	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 2023年第12回村上春樹国際シンポジウム 会議予稿集	6. 最初と最後の頁 128 ~ 135
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤城孝輔	4. 巻 11
2. 論文標題 メディア間の紐帯としてのアダプテーション 『森の向う側』(1988)の場合	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 2022年第11回村上春樹国際シンポジウム 会議予稿集	6. 最初と最後の頁 172-179
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤城孝輔	4. 巻 108
2. 論文標題 映画批評に見る創作のインスピレーション 鈴木清順の映画と村上春樹『騎士団長殺し』の比較を通して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 映像学	6. 最初と最後の頁 101-121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18917/eizogaku.108.0_101	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤城孝輔	4. 巻 58
2. 論文標題 アダプテーションを通じた語りの引き継ぎ 市川準『トニー滝谷』における父親の主題と原作への忠実さ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岡山理科大学紀要. B, 人文・社会科学	6. 最初と最後の頁 9-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤城 孝輔	4. 巻 15
2. 論文標題 Kタウンのかえるくん : 映画『神の子どもたちはみな踊る』における多文化共生社会とポスト9・11のアメリカ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 層 : 映像と表現	6. 最初と最後の頁 114-131
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14943/106289	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件(うち招待講演 2件/うち国際学会 4件)

1. 発表者名 藤城孝輔
2. 発表標題 反復される物語 村上春樹「パン屋(再)襲撃」と「4月のある晴れた朝に100パーセントの女の子に出会うことについて」の映画化をめぐって
3. 学会等名 日本映画学会第19回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 藤城孝輔
2. 発表標題 映画『風の歌を聴け』とその時代
3. 学会等名 第28回村上春樹とアダプテーション研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 藤城孝輔
2. 発表標題 映画『ノルウェイの森』におけるグローバル・アート・シネマへの擬態
3. 学会等名 2023年第12回村上春樹国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 藤城孝輔
2. 発表標題 レベッカ・ウォルコウィッツ『生まれつき翻訳』解説（序章・第二章）
3. 学会等名 第17回村上春樹とアダプテーション研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kosuke Fujiki
2. 発表標題 Hear the Other Sing: The Construction and Acceptance of Otherness in Drive My Car
3. 学会等名 Drive My Car: A Symposium on Hamaguchi's Cross-Media Vehicle（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤城孝輔
2. 発表標題 メディア間の紐帯としてのアダプテーション 『森の向う側』（1988）の場合
3. 学会等名 2022年第11回村上春樹国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤城孝輔
2. 発表標題 濱口竜介による村上春樹のアダプテーション
3. 学会等名 第18回村上春樹とアダプテーション研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤城孝輔
2. 発表標題 映画『神の子どもたちはみな踊る』における多文化共生とポスト9・11のアメリカ
3. 学会等名 日本映画学会第18回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kosuke Fujiki
2. 発表標題 Kore-eda and Okinawa: From Cocco to Like Father, Like Son
3. 学会等名 Around Kore-eda: An International Conference（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 中村三春（監修）、曾秋桂（編集）、マシュー・ストレッカー、高橋龍夫、ダルミ・カタリン、肖禾子、王佑心、楊炳菁、荻原桂子、佐古恵里香、藤城孝輔、鄒波、樋口達郎、葉りょう、黄如萍	4. 発行年 2023年
2. 出版社 淡江大學出版中心	5. 総ページ数 384
3. 書名 村上春樹における紐帯	

1. 著者名 佐藤元状（編集）、冨塚亮平（編集）、D・A・ミラー、斉藤綾子、西崎智子、ロバート・チェン、ファン・ギョミン、メアリー・ウォン、藤城孝輔、伊藤弘了、濱口竜介	4. 発行年 2023年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 256
3. 書名 『ドライブ・マイ・カー』論	

1. 著者名 中村三春（監修）、曾秋桂（編集）、森田典正、藤城孝輔、佐古恵里香、横川彰、呉勤文、佐藤敬子、斎藤正志、葉りょう、樋口達郎	4. 発行年 2024年
2. 出版社 淡江大學出版中心	5. 総ページ数 -
3. 書名 村上春樹における擬態	

〔産業財産権〕

〔その他〕

本研究内容をまとめた単著の企画が森話社の承認を受け、出版されることが決定している。現在再校の校正段階に達しており、本年度中には刊行される予定である。
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------